

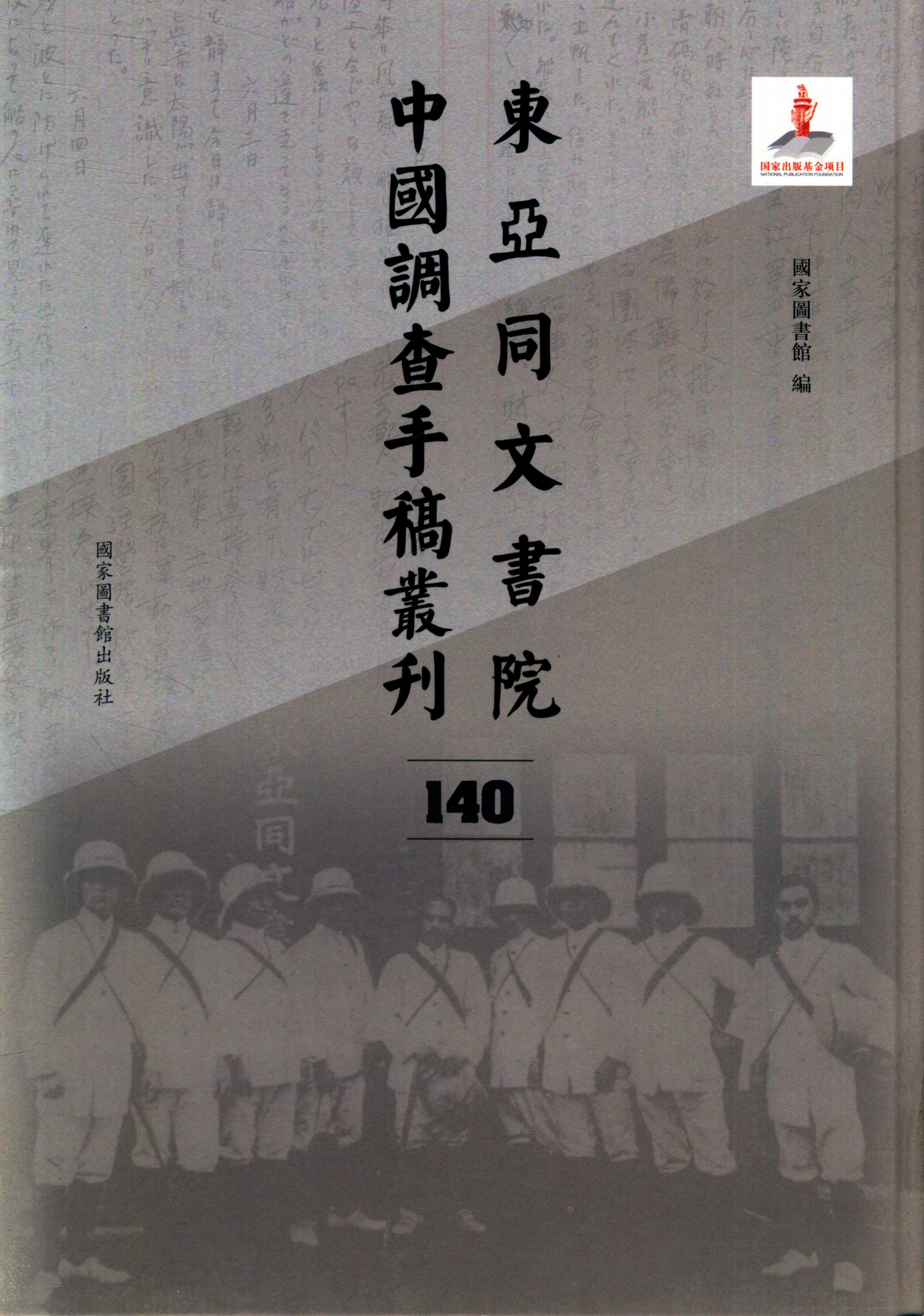


國家圖書館編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

140

國家圖書館出版社



國家圖書館
編

東亞同文書院
中國調查手稿叢刊

140

國家圖書館出版社

第一四〇冊目錄

昭和六年（一九三一）調查報告（第二十八期生）

東三省財政事情

東三省財政情況 岩田由一 關家三男 莊子勇之助

第六卷……………一

濟南ニ於ケル外國商品

濟南的外國商品 岩下輝夫 石田幸三郎 石橋春男 長谷川稔 門井博

第七卷……………四七

濟南ニ於ケル會館公所

濟南的會館公所 岩下輝夫 石田幸三郎 石橋春男 長谷川稔 門井博

第八卷……………一一九

香港ヲ中心トシタ日貨ノ動キ

以香港爲中心の日貨動態 五島利一

第九卷……………二二九

雲南敘州間の一般狀勢

雲南敘州間の一般情況 五十嵐利貞 大橋貞夫 田中辰一 宇野正四 遠藤進 第十卷 …… 三三三

香港の市制・市勢

香港的城市制度和城市情況 平澤常彦 第十一卷 …… 三九三

福州港勢調査報告書

福州港情況調査報告書 白川俊三 岡本豊 上野宏 野中義雄 安達郁太郎 第十二卷 …… 四八五

廣東省潮安縣ニ於ケル農業

廣東省潮安縣農業 羅振麟 第十三卷 …… 五三九

昭和七年（一九三二）調査報告（第二十九期生）

滿洲國內ニ於ケル通貨

滿洲國內的貨幣 第二十二卷 …… 五九七

昨年來ノ湖北大水災ニ就イテ
關於去年以來の湖北大水災 趙俊生

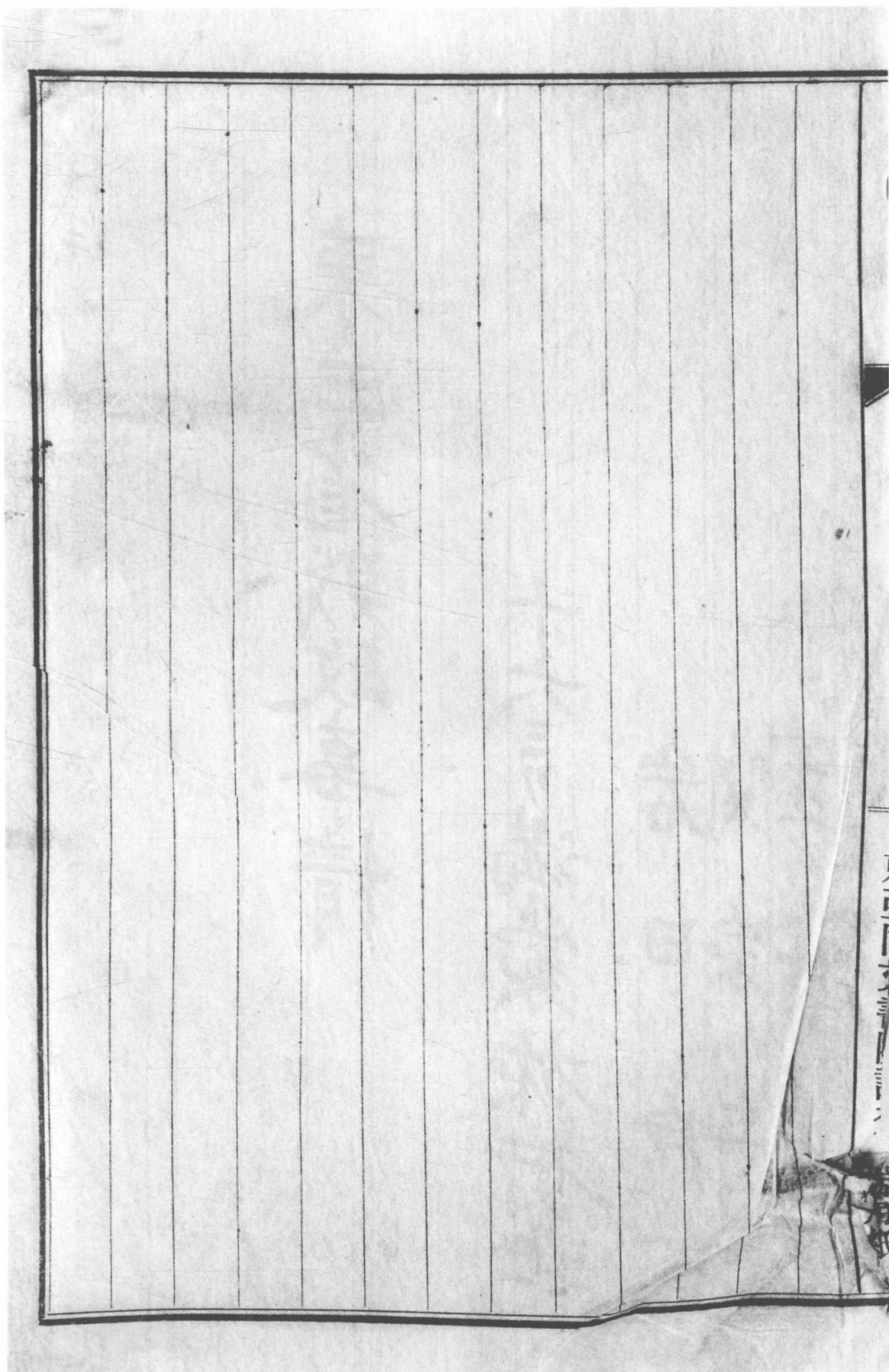
第七十八卷 六一

增訂日誌

東三省賊政事情

十六三滿蒙旅行班

岩田由一
関家三男
左子勇之助



序

緑滴は初夏の候我等三人は滿蒙の旅行に出發した。時恰も滿洲に於ける日支關係は益々險惡なる營業稅實施問題行政權侵犯問題、鮮人壓迫問題を中心とする支那官憲の對日感情惡化との事毎に紛争を惹起し、非常なる危機を孕んだ状態に置かれてゐたが免れ角も我等、一ヶ月の旅は何等、事件も會せずして濟んだ。やれ、と旅の疲れも癒せざると萬宝山事件更にそれを動機として朝鮮に空前、排支暴動を惹起し加ふる中村大尉事件の轟々を見て、滿洲の荒野は今にも張り裂けんとするもの如く日支感情の尖鋭化その極に達した。突如九月十七日午後十時奉天の地方柳樹屯附近に於て支那官兵の一隊が滿鉄の軌條を爆破した事件より山東出兵以來の大衝突を起し、世界戦争の端緒を

東亞同文書院蔵書
りかぬまじき形勢を立ち至つた。かくて東北四省の政權も振舞ふた張學良は其の地盤を失墜し、今やこゝは新しい理想の政府が出現せんとしてゐる。

我々の調査せる「東三省」に於ける財政事情は此の歴史的重大事件突發以前、滿洲に於て調査せるものとある。支那は謎の國だと云ふやうなものが成程他の國とは趣きを異なしてゐる。政府と人民との關係は恰も地主と借家人の如く分離した別個のものである。政府は政府な政府を保持するため、軍隊を養ふ費用を税租として徴収するだけであつて、其他は人民が自ら生れ育ち死するに任せられてゐる。即ち「日出でて起き日入る息を井を鑿して飲み耕して食ふ」帝力我々は何かあるんや」と云ふのが支那人民の本領である。斯う如き政治下は存する支那特有の財政状態に興味を以て調査せる所を

こゝに述べておられるところである。

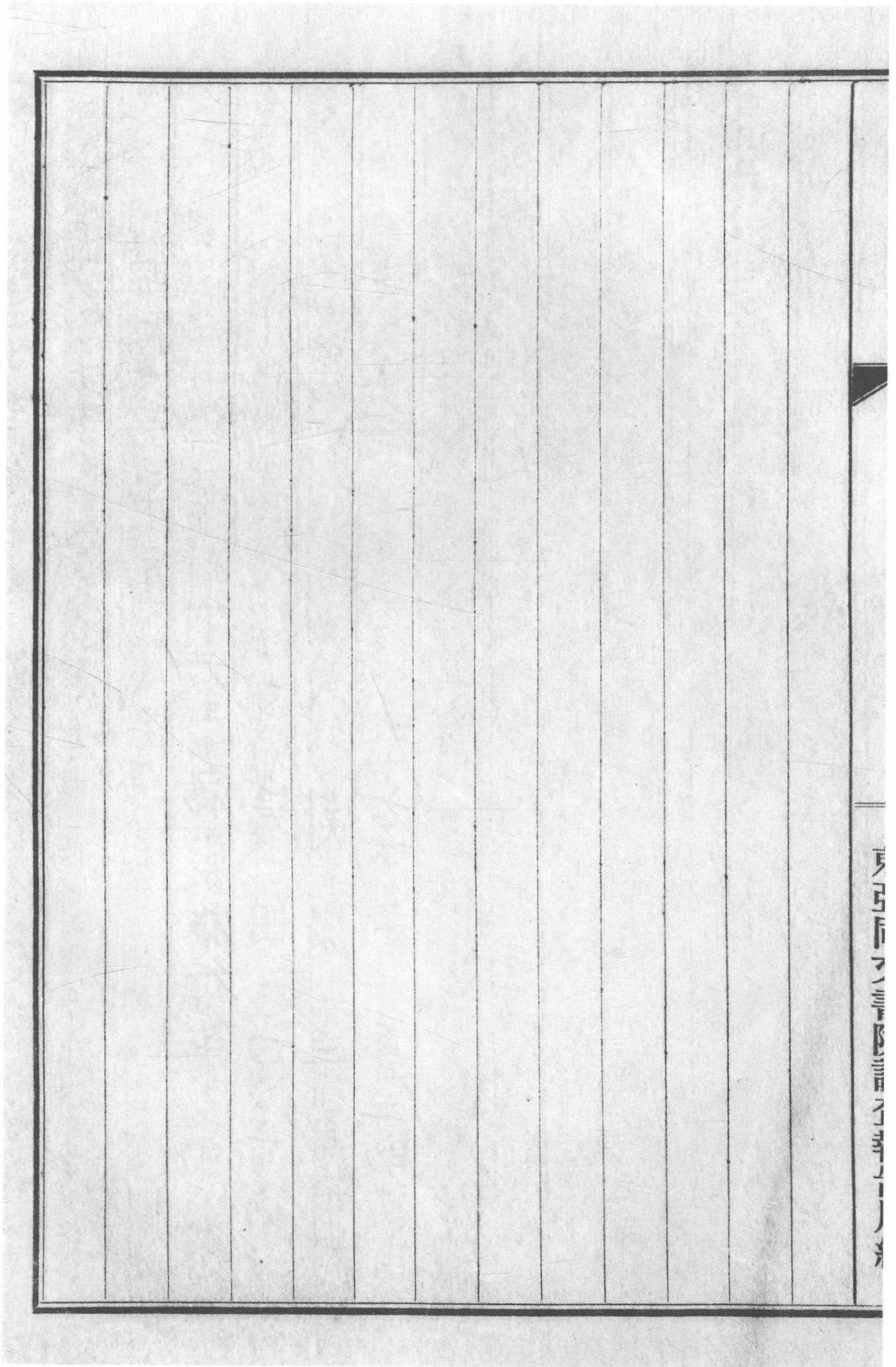
昭和六年十月

十六日 満蒙旅行班

岩田 由一

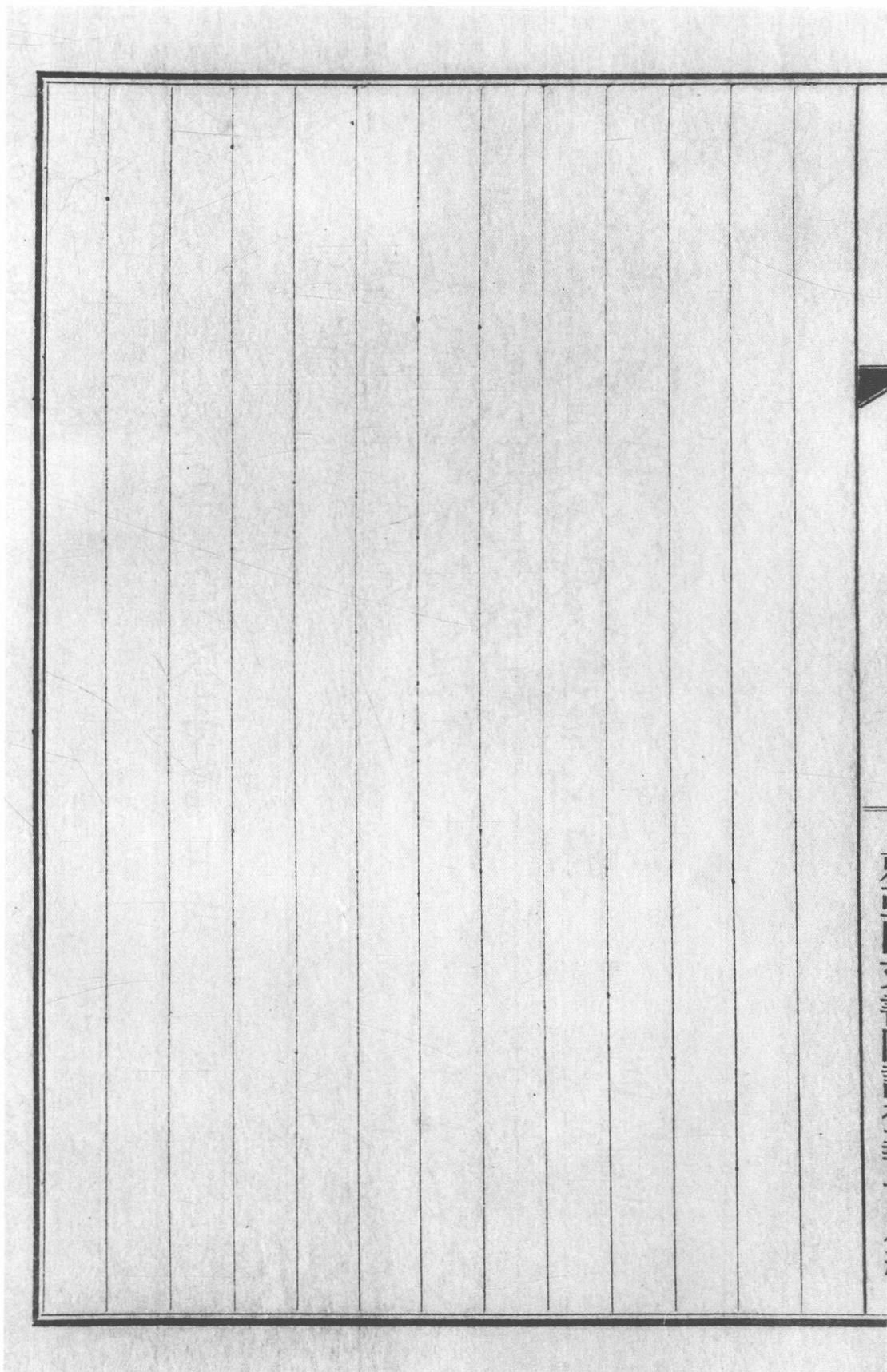
関家 三男

庄子 勇之助



東三省財政事情目次

- | | |
|--------------|----|
| 一、諸言 | 一 |
| 二、財政制度 | 五 |
| 三、東三省財政の現状 | 一一 |
| 四、釐金徹底問題 | 二四 |
| 五、東三省財政と國際關係 | 二七 |
| 六、結言 | 三六 |



一 緒 言

東三省の財政と云へば、文郡中央政府財政に對する「地方財政」の如く考へられ、末に、事實は未だ名目上は別として、財政的には統一國家の實を備へていない關係上、東三省財政は東三省の占むる区域内に行はるゝ中央政府とは全く別個の其の地實力者の個人財政である。これは民國革命以後、文郡が群雄割據の封建制を執つて居つた結果、今日國民政府より全國が統一せられても各地の群雄がそのまゝ其の割據している地域の國民政府地方長官を補せられたので、中央政府としてはこれ等長官が従来まで長官個人の私經濟收入として居つた財政に對し、今直に改革を加へ、財政を中央に統一するといふ事が出来ず、いふがある。従つて東三省の財政を述べると、名目上國稅とか省稅とかの區別があつても、それは文書上

の言葉が事實は各省の收入として處理してゐるものが關稅と
鹽稅の一部を除きましては東三省財政と中央財政とは何の關
係もないものである。

之、如く封建財政下としての東三省は支那と云ふ國家の
地方財政では全く今までは張作霖の個人財政であつた。従つて
その歳入歳出の關係も、究局の目的が自己の收入を多し多く
するといふ点にあるを以て、歳出は兵隊の多き目下けられ、歳
入はあらゆる方法で苛斂誅求し、所謂出づるを量入に、入るを制
すといふ財政上の原則は捨てて省みられざるのみかゝつてその
反對に入るを量入と出づるを制すといふ亂態を續け來つての
である。

省民の側と致しても、苛斂なる有様なるを以て租稅を以て生
産的剰余に對する政治的參加等といふ事は夢にも考へ

られず、唯封建領主に對する貢物と觀念して税の徴収は應
じゐたのである。こんな政治下にある省民としては東三省がど
うなろうと、張學良がどうなろうと敢へて関知する所ではな
く、唯自分等自身に租税がより少くよく平和な生活を行け
とへすばかりといふのが彼等、氣持である。奉直戦争当時
に於ける増税に對し省民が張に對して怨嗟の聲を絶た
なかつたことは、這般の消息を雄辯に物語らるゐる。即ち若し
張作霖が主として政治が真に省民を懸念しての政治
であつたなら、此の戦争に對してはあらゆる犠牲を拂ひ、各
に示かつたであらうが、張は常に非民立的政治はこれ等戦争
をも全く張個人の野心に基く私闘として、少くも増税をも苛斂
誅求と騷ぎ立てた。如何に又即人と雖も、主として政治が真に
民立政治で、省民と省民と省民と省民と省民と三者が相離すべ

かゝるものから去るべきが植之付けられ居れば、國家觀念はよくとも地方觀念は甚だ疎遠となり、戦争を目し、省の安全延びは自分等自身に休戚を懸念するものとなり、財政は愚か身命をも抛擲するに躊躇せざるものとなり。斯くの如く支那人の政治家は對する氣持即ち政治そのものに對する理解が未だ封建的である限り、財政は對して近世國家の地方財政と云ふ理解は乏しきものである。東三省の財政を論ずるに當り、財政に對するこの政治家としての態度と省民の態度を明かにして置く必要がある。